

日本の中国現代 文学研究

鈴木将久（東京大学）



目次

- 1、戦前・戦中の研究：同時代の観察と思考
- 2、戦後における研究：中国革命への共感と日本の状況への批判的視点
- 3、文革中の研究：研究者間のイデオロギー対立と新たな模索
- 4、80年代以降の研究：研究の国際化、多角化と学術化

【参考】丸山昇「日本における中国現代文学」『魯迅・文学・歴史』汲古書院、2004年

1-A 青木正児「胡適を中心に渦いている文学革命」

劇曲小説の方面では余り目に立つ程のものは無い。翻訳に於ける周作人は近世大陸文学の紹介者としてその労多きに居る。訳筆も旧文明に囚はれぬ直訳体で、ひたすら原文の匂ひを出すことに力めてゐるやうだ。小説に於ける魯迅は未来のある作家だ、その『狂人日記』の如きは一つの迫害狂の驚怖的幻覚を描いて今まで支那小説家の未だ到らなかつた境地に足を踏み入れてゐる。

『支那学』1920年初出

丸山昇「日本における魯迅」、『魯迅・文学・歴史』より転引

1-B 増田渉「魯迅伝」

私に与へられた紙数はもう尽きた。私はもつと委く、魯迅について及び、魯迅をめぐって動いた、動きつつある近代支那成長史について書かねばならなかったが、種々の都合上かういふものになつた。私が曾て魯迅に魯迅論を書かうと思つてゐると言つて、その腹案を話したら、彼は早速「搔痒不著賛何益、入木三分罵亦精」といふ鄭板橋の聯をくれた。以て批評されるものの覚悟、といふより批評するものの心掛けを教へた。せめて入木すること三分くらゐはと自惚れたいものだ、何の益があるかはともかくとして。

『改造』1932年4月号

1-C 中国文学研究会

研究会が存在したこの10年間（1934年～1944年のこと：引用者注）は、満州事変につづいて、日本の中国侵略が全面的に進められた時期であった。このいわゆる“暗い谷間”の時期に、竹内好は「官僚化した漢学と支那学を否定することによって内から学問の独立をかち得ようとし」、その「自己改革の意欲」によって、同時に「学問一般の改造を志し、従って現代文化一般の批判者たらんことを企図」して研究会を組織し、そして結成当初の原則を曲げることなく研究会を維持しつづけた。それを可能にしたのは、竹内好の強固な意志とそれを支持して協力を惜しまなかった岡崎俊夫・武田泰淳をはじめとする同人たちの努力であったことはもちろんだが、何よりも大きな要素は、彼らがその武器として「一般外国文学研究の方法」という方法論をもったことにあると言える。

立間祥介編「中国文学研究会年譜」、復刻『中国文学』別冊、汲古書院、1971年

1-D 竹内好『魯迅』

しかし、一方からいうと、この『魯迅』は私にとって、なつかしい本である。追い立てられるような気持ちで、明日の生命が保しがたい環境で、これだけは書き残しておきたいと思うことを、精いっぱい書いた本である。遺書、というほど大げさなものではないが、それに近い気持ちであった。そして実際、これが完成した直後に召集令状が来たのを、天佑のように思ったことを覚えている。その張りつめた気持ちは、いまでもこの本を読みかえすとき甦ってくるものである。私は『魯迅』を書くことによって私なりの生の自覚を得た。この「処女作」は、ほかのどの本よりも私にはなつかしい。

「創元社版あとがき」、『竹内好全集』第一巻、筑摩書房、1980年
『魯迅』は1944年初版、創元社版は1952年出版

2-A 竹内好『現代中国論』

私は『魯迅』という著書を書き、兵隊にゆき、敗戦にあい、一九四六年夏に帰還した。この戦争の体験から自己を再形成するために、帰還後の私は、魯迅を読みかえす仕事を自分に課し、その報告を、別の『魯迅』という本と、『魯迅雑記』という本に収められている数編のエッセイとにまとめた。そのころから、魯迅を通じて考えていたことを、少しずつ別の対象なり分野なりに適用する評論を書き出した。この戦後数年の間に書きためた評論めいた文章が、一方で『現代中国論』となり、他方で『日本イデオロギイ』にまとまったのである。

「中国新書版あとがき」、『竹内好全集』第四巻

『現代中国論』は1951年初版

2-A 竹内好『現代中国論』

- こうした主体性の欠如は、自己が自己自身でないことからきている。自己が自己自身でないのは、自己自身であることを放棄したからだ。つまり抵抗を放棄したからだ。出発点で放棄している。放棄したことは、日本文化の優秀さのあらわれである。（だから日本文化の優秀さは、ドレイとしての優秀さ、ダラクの方向における優秀さだ。）抵抗を放棄した優秀さ、進歩性のゆえに、抵抗を放棄しなかった他の東洋諸国が、後退的に見える。魯迅のような人間が植民地型に見える。日本文学の目で見ると中国文学がおくれて見える。
- 私は、日本文化は型としては転向文化であり、中国文化は回心文化であるように思う。日本文化は、革命という歴史の断絶を経過しなかった。過去を断ち切ることによって新しく生まれ出る、古いものが甦る、という動きがなかった。つまり歴史が書きかえられなかった。だから新しい人間がない。

「近代とは何か」、『現代中国論』、論文初出は1948年

2-B 丸山昇 『魯迅—その文学と革命』

そうした《核心》が本質的なものであればあるほど、時の流れにつれて、それが核心として抽象されたときに現実との間に有していた緊張が見失われ、忘れられて、形骸化し、言葉に化して一人歩きし始める、といった現象は、とくにわれわれにとってなじみ深いものである。そしてそれが一人歩きし始めるや否や、その背後にあったはずの現実の重みもそこから抜け落ちて、それが最初に取り出された時に持っていた意味とは、似ても似つかぬものになってしまうのである。日本における魯迅にも、これに類する現象がありはしないか。私はもう一度魯迅を彼の生きていた歴史の中に返して、彼の精神の運動のあとを探ることで、彼の《核心》を掴みなおしたいと思ったのである。いいかえれば、彼の《核心》は、彼の精神が現実との接点で運動し、機能する、そのしかたの中にこそあり、それをそれとして明らかにするのに、事実を持って語らしめることにまさる方法を、さしあたって私は持ちえていないからである。

「あとがき」、『魯迅—その文学と革命』、平凡社、1965年

2-B 丸山昇 『魯迅-その文学と革命』

竹内好氏とのちがいは、前著『魯迅-その文学と革命』を書くことを通じて私の中に次第にはっきりとした形をとったものであり、それはあの本の中にもある程度出ているように思うので、ここでくり返して述べることはしない。たとえばそれは、竹内氏の魯迅像が、彼が光復会に加わらなかったと考える方が「魯迅文学の本質の理解に似つかわしい」とする考え方の上に立っているのに対し、私のそれは、青年時代におけるそれらの体験を抜きにしてはほとんど成り立ち難いという一点に代表されるちがいである。

「序章」、『魯迅と革命文学』、紀伊國屋書店、1994年復刻

2-C 伊藤虎丸『魯迅と終末論』

私にとって、第Ⅰ部の背後にあったのは、“戦後民主主義”における「文化の全体性の回復」の志向の、その後における挫折という問題であったが、第Ⅱ部での私なりの新しい発見(?)は、「戦後民主主義の空洞化」の原因は、それ自体が全体としていわば進化主義的であって、それが決定的に欠いていたのは終末論的思考であった、ということ自体の中にあっただのではないか、ということであるとも言えよう。そして、これも実は、恐らく、戦後の竹内好氏の発言（「近代の超克」論や「国民文学論」）の中心的テーマの少なくとも一つだったものの言いかえにすぎないのではないか、と思われもするのである。

「序に代えて」、『魯迅と終末論』、龍溪書舎、1975年

第Ⅰ部は「初期魯迅におけるヨーロッパ」：初期魯迅を論じる

第Ⅱ部は「魯迅の進化論と“終末論”」：『狂人日記』を論じる

2-D 木山英雄 「『野草』的形成の論理ならびに方法について—魯迅の詩と“哲学”の時代—」

私は詩と哲学といったが、『野草』の全体を通じていえば、その二つは別々のものではない。このばあい、詩は単なる情緒の音楽ではなく、哲学は概念の組み立てによる思弁ではなく、両者は全身をかけた形成の迫真力において一つである。少なくとも『野草』の背骨をなす一連については、そうである。『野草』の各篇はそれぞれ独立の一篇をなしているし、排列も書かれた自然の順序に従っているだけであるが、最初の三篇が一緒に『語絲』に載った時から『野草』という総題は冠されていて、一連の作品群となるべき衝動を、予め作者が感じていたことを示す。そうして、できあがった集の中に、私はやはり一連の形成の努力を見る。以下の仕事は、『野草』の個々の作品論というよりは、問題の時期の魯迅の連続的な努力を、主としてその論理と方法に狙いを置きながら、構成しようとはかった結果である。

木山英雄 「『野草』的形成～」、『東洋文化研究所紀要』第30冊、1963年

2-E 中国現代文学の翻訳

1. 奥野信太郎ほか編『現代中国文学全集』全15巻、河出書房、1954-1956年。
2. 増田渉・松枝茂夫・竹内好編『魯迅選集』全13巻、岩波書店、1956年。
3. 小野忍・竹内好・中野重治・松枝茂夫・増田渉編『中国現代文学選集』全20巻、平凡社、1962-1963年。
4. 『中国革命文学選』全15巻、新日本出版社、1963-1965年。
5. 『世界革命文学選』、新日本出版社、1962-1970年。

※増田渉、竹内好、小野忍など研究者の翻訳と、島田政雄（1912-2004）、鹿地亘（1903-1982）など中国滞在経験のある人による翻訳・文学紹介活動。

3-A 丸山昇『現代中国文学の理論と思想』

私は、あるべきマルクス・レーニン主義なり「毛沢東思想」なりの路線を設定し、それに照らして現実に行われた路線の「偏向」「逸脱」として問題を論じるという態度をつとめて避けたいと考える。解放後の文学・芸術の歩みを、「正しい」路線がさまざまな「誤った」路線を克服して自己を貫徹した跡としてではなく、すくなくとも一応は、中国の文学者・芸術家たちが、さまざまな新しい情況・問題に直面するなかで、それなりに問題にとりくみ進路を見いだそうとした努力と、そこから生まれたさまざまな成功や失敗の跡として見よう、というのが、私の意図である。……それを私があえてくり返すのは、このことが、「文革」のあり方に関わっているだけでなく、より根本的には、われわれが築こうとしている、真の民主主義に立った社会主義社会のありかたにも関わっていると思うからである。

「中国における文学論と文芸政策」、『現代中国文学の理論と思想』、日中出版、1974年、論文初出は1972年。

3-B 新島淳良『毛沢東の思想』

中華人民共和国が五月九日、三回目の核実験をおこなった。私はまずこの事件の政治的な意味を、なるべく多次元的に考えてみたい。そのなかで中国でいまおこなわれている文化革命（整風と学習）が、どの次元で核実験と結びつくのかを考えたい。

中国は徹底的な整風をつうじて、つぎのように問いかけている。／われわれはあくまで現代修正主義に反対して世界革命を推進する。きみはどうするのか。／このよびかけは、いわば根源的な問いであって、非実践的に答えることができないものであり、早急に結論を出すこともできないものだ。このよびかけは、日本人として、日本国民として、あるいは人民としても人類としても答えてはいけないし、答えられないものだ。そのような答える主体の分析のほうが先決であり、その分析の主体は個々のわれわれである。

「核実験の意味・整風の意味」、『毛沢東の思想』、勁草書房、1968年
論文初出は1966年

3-C 新島淳良『魯迅を読む』

魯迅の文章は、中国の事実（社会や事件や人や自然）を直接にあらわしたものであるのではない。魯迅の文章に、中国の歴史や社会を見ることはできない。事実について、魯迅がどう思い、考えたか、ということと、その言語表現、この二つだけを魯迅の文章は私たちに伝えるのである。この両者の関係は、（1）事実についての考え方の物質的基礎は言語表現である、（2）言語表現にない〈考え方〉は存在しない、という関係にある。したがって、魯迅を理解するには、まず中国語にはどういう言語表現があり、どういう言語表現しかないか、を日本語との比較でつかんでおく必要がある（これは私が日本人だからそう言うので朝鮮人なら朝鮮語との比較でつかめばよい）、つぎに魯迅がどういう言語表現をえらんだかをつかむという手続きが必要になる。

「魯迅に向う姿勢」、『魯迅を読む』、晶文社、1979年

3-D 竹内好の発言

現在はいろいろな人がいろいゝろな意見を出されるけれども、どうもなるほどという気はしないのです。まだ、うまく全貌がつかまえないのではないかという感じなんですがね。たとえば49年の人民共和国の成立を一つのエポックとして、それはたしかに政治史的にながめれば、国家が変わったわけですから、エポックには違いないのですけれども、49年でピタッと前後が分かれて、そこから段階を追ってきている、いまの文化大革命もその一つの段階だというふうに、革命の流れをとらえるのがいいのかどうか。その点は私はまったくお手上げなんです。むしろ文化大革命を非常に大きくつかまえる立場からすると、49年の革命からずっときて、ここでピリオドを打った、ここから新しいものがはじまるという考えもできるわけです。

武田泰淳・竹内好「私の中国文化大革命観」、『状況的』、合同出版、1970年
対談初出は1967年

3-E 木山英雄 『北京苦住庵記』

たまたま私がこの仕事にかかっていた期間中に、周恩来を皮切りに朱徳、毛沢東、武田泰淳、竹内好、増田渉といった人々が、あれよあれよとばかりにたてつづけにこの世を去っていった。いずれも懐かしい限りの両国の豪傑才子の記念をかねて寸言を加えれば、ここに扱ったのは、まさにこれらの人々の時代に属する事件であった。……この記述をすることが、これはこれなりの時代的制約を帯びた経験にほかならなかつたろうとしても、その経験を確かな意味にまで透明化しきれぬ憾みが、時にさような怪をなすのであるらしかった。それは今でも同じことであって、とりわけ革命アジアのゆくえをも不透明ならしめるもろもろの兆候に事欠かぬ昨今において、私はこの本が、次なる時代の低迷と閉塞の徴表になりおわることなどのないよう、時代のためにも自分のためにも望みたい。もとをいえば、混乱など根っから知らぬげなあれこれの中国談義への面当てをも、少しは動機に含んでやったことだったにせよ、混乱じたいが自慢になるわけではないのだから。

「あとがき」、『周作人苦住庵記』、筑摩書房、1978年

4-A 二十世紀中国文学

我々はそれぞれの研究課題の中で、期せずして、しだいに、「二十世紀中国文学」という一つの概念を生み出した。初歩的議論を通じて我々が見出したのは、それは単に現在の「近代文学」「現代文学」「当代文学」という研究の枠組みを貫通させるだけでなく、また研究領域の拡大だけでなく、二十世紀の中国文学を分割不可能な有機的全体としてとらえるものであるということであった。

……

目下の基本的な構想はおおむね以下のようなものである。「世界文学」に向かう中国文学、「民族の魂の改造」をテーマとする文学、「もの悲しさ」を核心とする近代的美感、文学言語の構造から表現された芸術的思惟の近代化の過程、そしてこうした概念が関係する文学史研究の方法論の問題。

黄子平・陳平原・錢理群『二十世紀中国文学三人談』、人民文学出版社、
1988年より翻訳

4-B 藤井省三『ロシアの影—夏目漱石と魯迅』

漱石と魯迅は、ともにこの日露戦争後の状況において東洋がいかなる近代を創出すべきかという自らの思想的課題を自覚し、これを文学の領域において、もっともラディカルに追求した文学者である。時代状況とその最深部で関わろうとするとき、個の主体性はいかに獲得されうるのか、そして状況認識が逆に個において発現せしむる自我の閉塞を主体的個はいかに越えていくのか、漱石と魯迅がこのように問いはじめたとき、二人の視界に捕らえられた先駆的営為がアンドレーエフ文学であった。……本書はアンドレーエフ文学の受容を中間項として、漱石と魯迅の文学的営為を比較研究することにより、これまで神話のヴェールに覆われてきたその思想の核心に迫ろうとする試みである。

「はじめに」、『ロシアの影—夏目漱石と魯迅』、平凡社、1985年

4-C 丸尾常喜『魯迅-「人」「鬼」の葛藤』

本書で行おうとしたのは結局のところ、中国伝統社会は魯迅の小説によってどのようにとらえられたか、を明らかにすることである。つまり、第一に魯迅のとらえた中国伝統社会を、歴史学、思想史学、宗教学、民俗学などの研究成果に力を借り、時空の壁を少しでもくずすことによって理解しようところみ、第二にそれが小説としてどのようにとらえられているか、魯迅における小説の方法を、やや細部にわたって具体的に読み解こうとしたものである。第二の点についていえば、それは三つの作品を対象に個別的、具体的な考察をこころみたものであり、積極的に魯迅の文学方法や思惟方法の抽象的、理論的把握を追求している人びとからも、忌憚のない批判、検討を得ることができれば幸いである。

「あとがき」、『魯迅-「人」「鬼」の葛藤』、岩波書店、1993年

4-D 阪口直樹『十五年戦争期の中国文学 -国民党系文化潮流の視角から』

一九六六年から一〇年に及んだ「文革」はその過程で数多くの否定的な文学事象を顕在化させ、その後我々の研究態度及び方法に再検討を迫ったが、私の場合、問題意識の明確化は一九八一年の「“文学史観”と“文学的事実”のはざま—新版各種『中国現代文学史』を考察する」がきっかけだったように思う。これは『野草』の特集テーマ「『中国現代文学史』諸本の検討」にあわせて執筆したものだが、三〇年代に焦点をあてながら、各種文学史が特定の文学史観によって、文学的事実の不正確な叙述を生み出していることを指摘したものであった。

4-D 阪口直樹『十五年戦争期の中国文学』 -国民党系文化潮流の視角から』

これらの事実は、「左連」をめぐってこれまでの固定的な価値観、すなわち魯迅＝善、周揚＝悪とか、「国防文学」派对「民族革命戦争的大衆文学」派とかいった固定的・図式的把握ではなく、作家たち相互の“関係性”を重視する視点を導入することの重要性を浮かび上がらせてきたといえる。またこの観点は、単に作家間に適用されるだけではなくて、「左翼文学・都市の文学・“民族主義”文学の三派鼎立」状況にあった三〇年代文学において、いくつかの文学流派間にも拡大適用が可能となるであろうし、とりわけ左翼文学が国民党系文化潮流との競合と対立を強制された状況下においては、両者の“関係性”を重視する視点を導入することなしに、文学状況はその像を明確にしてこないにちがいない。

「序章 十五年戦争期中国文学と国民党」、『十五年戦争期の中国文学』、
研文出版、1996年

4-E 岡田英樹『文学にみえる「満洲国」の位相』

わたしは、満洲国の文学を研究する過程で、つぎのような竹内好のことばにぶつかった。

われわれにとっては、歴史の始末をつける仕事は、誰かがやらねばならぬと考える。……

満洲国が解体して55年、竹内の警告が発せられて37年、残念ながらいまだ日本国家による葬式はだせていない。わたしは、……満洲国という舞台を借りて、日本のナショナリズム—それは国家権力として発露する場合もあろうし、個人の意識から顕現する場合もある—に対抗してあらわれる中国人の意識を考察してみたいと考える。異物が—しかも権力をにぎった異物が侵入してきたとき、必然的に生まれる抵抗体を、人間の意識の面からとらえようとするところみである。これも「歴史の始末をつける仕事」の一つとはなるであろう。

「序」、『文学にみえる「満洲国」の位相』、研文出版、2000年

小結

中国認識の窓口としての文学研究



中国認識と自国の思想課題の結合



過剰な「政治」との関わり



学術研究の一環としての研究

※中国現代文学研究と中国認識の関係性を取り戻すことは可能だろうか？